

詩篇 2 篇に見る「神の定め」(神のマスタープラン)

はじめに

●詩篇 1 篇の「その人」は、詩篇 2 篇では以下のように言い換えられています。主に油注がれた「王」(「メレフ」(מֶלֶךְ)、天の座に着いておられる方が呼ぶ「わたしの子」としての「ベーン」(בֶּן)、あるいは、人称なき存在が指し示す「御子」(「バル」בֶּן)、いずれも、単数です。

その人(単数) ハー・イーシュ הַאִישׁ	① 主に油注がれた者 (単数) マシーアッハ מְשִׁיחַ
	② (わたしの)王 (単数) メレフ מֶלֶךְ
	③ (わたしの)子 (単数) ベーン בֶּן
	④ 御子(単数) バル בֶּן

- ① 主に油注がれた王・・・人称なき存在
- ② わたしの王・・・・・・御坐についておられる方
- ③ わたしの子・・・・・・御坐についておられる方
- ④ 御子・・・・・・人称なき存在

●詩篇 1 篇の「その人」、および詩篇 2 篇の「主」「主に油注がれた者」「王」「子」「御子」に逆らう者たちはすべて複数形で表されています。詩篇 1 篇では「悪者」「罪人」「あざける者」が、詩篇 2 篇では「国々」「国民」「国民」「地の王たち」「治める者たち」と言い換えられます。

新改訳	ヘブル語	新共同訳	口語訳
国々	「ゴーイム」 גוֹיִם	国々	もろもろの国びと
国民	「レウミーム」 לְאֻמִּים	人々	もろもろの民
地の王たち	「マルハー・エレツ」 מְלֻכֵי אֶרֶץ	地上の王	地のもろもろの王
治める者たち	「ローズニーム」 רוֹזְנִים	支配者	もろもろのつかさ

1. 「きょう」という主の定め

【新改訳改訂第 3 版】詩 2:7

「わたしは【主】の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。・・・ここでの「わたし」は「子」「御子」のこと。

『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。・・・ここでの「わたし」は「御父」のこと。

ここでの「あなた」は「子」「御子」のこと。

① ヘブル人への手紙 1 章 5 節【新改訳改訂第 3 版】

神は、かつてどの御使いに向かって、こう言われたでしょう。「あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。」またさらに、「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」

② 使徒の働き 13 章 33 節【新改訳改訂第 3 版】

神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。

詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』と書いてあるとおりです。

●詩篇 2 篇は多くのところで引用されていますが、特に、7 節にある「きょう、わたしがあなたを生んだ。」というフレーズの「きょう」をどのように理解すればよいのでしょうか。その理解の視座として、ヘブル的視点、御国の視点が必要です。

●「きょう」という言葉は、私たちが考えている「昨日、今日、明日」という意味での「今日」ではありません。ヘブル語では「ハッヨーム」(חַיּוֹם)で、「その日」とも訳せます。つまり「ハッヨーム」(חַיּוֹם)は、神によって「定められた日」、神によって「しるしづけられた特定の日」を意味します。永遠者としての神のなされる神のご計画における「定め」(「ホーク」קָח)が、時との関係で表現される時に「ハッヨーム」(חַיּוֹם)、すなわち「その日」、あるいは「きょう」(「今日」ではなく「きょう」と表現されているのです。

●イエシュアが十字架の上で、強盗の一人に「あなたは、きょうわたしとともにパラダイスにいます。」(ルカ 23:43)と語ったときの「きょう」も、神の定められた特定の日を意味していると考えられます。その証拠に、強盗の一人がイエシュアに対して、「あなたの御国の位にお着きになる時には、私を思い出してください。」と言っているからです。このことに注意する必要があります。この強盗が語った「あなたの御国の位にお着きになるとき」とは、イエシュアが天で御父に右の座に着いたときのことではなく、御子が地上に再臨され、王なるメシアとして地を支配されるときを意味しています。強盗が悔い改めたあとで、そのことを確信して語っていることばなのです。彼は自分の犯した罪を認め、それにふさわしい報いを今受けていることを自認しています。そして今群衆の呪いと嘲りの声が渦巻く中で、ともに死にゆくメシアであるイエシュアに、「私を思い出して下さい」と願っているのです。彼に対するイエシュアの答えは迅速、かつ確実でした。「あなたはきょう、わたしといっしょにパラダイスにいます」。なんとあざやかな救いの宣言でしょう。ここでの「きょう」も「ハッヨーム」であり、私たちが考える「今日」(today)という意味ではないのです。メシアニック・ジューの聖書によれば、「パラダイス」を「エデンの園」である「ガン・エーデン」(גַּן־עֵדֶן)という意味で訳しています。

●アダムとその妻エバは罪を犯した後で「エデンの園」から追放されました。ですから、もしそこにイエシュアと人が共にいるということが可能であるとすれば、人は新しいからだをもっていなければなりません。ですから「あなたはきょう、わたしといっしょにいる」ということは、神の定められた時に実現する「パラダイス」(=回復された「エデンの園」)に、「あなたは、わたしとともにいる」ことを約束されたと理解すべきです。

●ルカの福音書 2 章 11 節の有名なクリスマスのみことば、「きょうダビデの町(ベツレヘム)で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。」とあります。ここでも「きょう」は、神が定められた「ハッヨーム」(חַיּוֹם)です。そして「お生まれになりました」は、「生んだ」(「ヤーラド」יָלַד)の完了形受

動態です。神はご自身の約束に従って、神である御子を時間の中へ、歴史の中へと介入させたのです。御子は人間として最も弱い立場である赤子としてスタートし、その生涯の終りには人間として恥辱と死を味わわれました。「味わう」という動詞はアオリスト中態(受動態でなく)で、自らの主体的な意志によって「味わった」のです。それは御子ご自身のためではなく、「私たちのため」です。

●主の祈りの中に「みこころが天になるごとく、地にもなさせたまえ」とあるように、天にある主の定めをなす御子を地に介入させるという意味において「生んだ」という表現がなされていると思われます。「あなたの御国の位にお着きになる時には、私を思い出してください。」と言った強盗は神に立ち返ったことで、神の定め(ご計画)を悟ったのです。

●御父は御子にこう告げられます(詩篇 2 篇 8~9 節)。

8 ・ ・ わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。

9 あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。

●御父はこの御子に敵の審判をゆだねられます。御子は「鉄の杖(曲がることのない権威の杖)」で、敵を打ち砕き、全世界を統治されます。その日は刻々と近づいています。勝利はすべて十字架と復活のみわざを通してなされましたが、この世において、それが目に見える形で実現するのはまだ先のことです。シオンに立てられたメシアが勝利をもって諸国を治め、世界を支配するという枠組みは、キリストの再臨によってもたらされる千年王国において実現します。そしてその実現が間近に迫っているのです。それゆえ、人称なき存在(作者)は、全世界のこの世の支配者たちに降伏を呼びかけ、御子に対する礼拝を呼びかけているのです。ここで呼びかけているのはだれでしょうか。それは「人称なき存在」である聖霊です。

【新改訳改訂第3版】詩篇 2 篇 10~12 節

10 **今**、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。

11 恐れつつ【主】に仕えよ。おののきつつ喜べ。

12 御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。

●ところで、10 節の「今」は、神の定めた「ハッヨーム」(רִיבּוֹנִים)ではなく、常に呼びかけられている「**今**」、つまり「アッター」(הַתְּהִיבּ)が使われています。その「今」だからこそ、「悟る」のに望みがあります。しかしやがては、そのチャンスを失ってしまう時が来ます。その時は主を信頼する者にとっては救いと喜びの日となりますが、そうではない者にとってはさばきと滅びの日となるのです。それが**主の定め**(神のマスタープラン)である「ハッヨーム」(רִיבּוֹנִים)です。それゆえ人称なき存在は、地のすべての王たちとさばきづかさたちに対して、御子に「口づけせよ」(「ナーシャク」נָשַׁק)と命じています。昔、中近東では、支配者に対する忠誠と従順を表わす行為として足に口づけしたようですが、ここでの御子に「口づけせよ」とは、御子を礼拝するようにとの招きです。

●「悟れ」(目を覚ませ)、「慎め」(教えを受けよ)、「恐れつつ主に仕え、おそれつつ喜べ」と呼びかけます。それは、主の怒りから免れるために、自らの道で自滅しないように、神の代理者である油注がれた御子を礼拝することを、「人称なき存在」である聖霊が呼びかけているのです。

●神が王であるという思想は詩篇の中に数多くあります。たとえば詩篇 93 篇、96 篇、97 篇、99 篇がそうです。すでに、王である小羊イエシュアは、今、御父の右の座に着き、大祭司して、私たちのためにとりなしておられます。ですから、たとえ、どんな問題(艱難、苦しみ、迫害、飢え、危険等)が襲ったとしても、だれも神の愛から私たちを引き離すことはできません。なぜなら、この「主に油注がれた方」によって、私たちはやがて圧倒的な勝利者となることが**定め**られているからです。

2. 神の「定め」

●「定め」と訳された「ホーク」(**פֶּה**)は、権威ある神の「定め」であり、それは神のご計画、神のマスタープランを意味していると考えられます。詩篇 2 篇は、神の救いの計画の全体の概要を示しているという意味において預言的な詩篇と言えます。すでにキリストの初臨において神の勝利の布石は置かれています。しかし、詩篇 2 篇に記されていることが成就するのはキリストの地上再臨の時です。

●私たちの現実におけるさまざまな不条理な事柄でさえも、神の救いの歴史の全体像の中で理解することが求められています。そしてそれが神への信頼をより深めていくと信じます。ところがなかなかこれができないのが私たち人間です。いつの時代においても、神と神に油注がれた者に敵対する勢力は存在します。それはサタンが神と人とのうるわしい信頼関係を妬むからでしょう。しかし詩篇 2 篇で記されているように、「天の御座に着いておられる方は笑う」のです。つまり、神はご自身に対して敵対する者たちに対して、ものともせず、動じないのです。むしろ、神ご自身が自ら王を地上に立て、鉄の杖で彼らを打ち砕かれるという構図がはっきりと示されています。私たちはこの構図の森の中に存在しています。このような構図を私たちがどれだけ信仰によって見るができるかによって、神への信頼は強まると信じます。

3. 「主に身を避ける」という表現

●第 1 篇と第 2 篇に共通する「幸いなことよ」(新改訳)に注目します。尾山訳では「ああ、なんと、幸いなことだろう。」ですが、この訳のほうが、実感がこもっているように思います。第 1 篇では、積極的な意味で、幸いな人とは、「主の教えを喜びとし、昼も夜もおしえを口ずさむ」人でした。そして第 2 篇では、「幸いな」(12 節)人とは、「**すべて主に身を避ける人**」(複数)です。

●「身を避ける」ということばをいろいろな訳で見ると、口語訳では「寄り頼む」、関根訳「依り頼む」、共同訳では「避けどころとする」、LB では「信頼する」、NKJV 訳では trust となっています。この「身を避ける」と訳されたことばは、実に詩篇全篇に、しかも、頻繁に、均等に登場します。それだけ神との関

係において重要なキーワードと言えます。

●詩篇 2 篇の「主に身を避ける」とは、<防衛の保障>の祝福をもたらします。防衛を表わす用語として、盾、岩、避け所、とりで、助け、力・・・といった表象が用いられます。詩篇 3 篇にはその表象が出てきます。私たちが身を避けることのできる方がだれであるのか、はっきりしている時は賛美がなされ、それははっきりしないときは嘆きとなって表われます。「地的現実」に目を向けることなく、「天的現実」に目を向けることが不可欠だが、そのためには、神の定め(マスタープラン)における「きょう」を知らなければならぬのです。

付記

●ところで、新約で「きょう」(「セーメロン」σήμερον)という語彙を福音書の中から検索してみると、マタイ 5 回、マルコ 1 回、ルカ 11 回、ヨハネ 1 回です。ルカが圧倒的に多く使っています。その最初は「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」(2:11)。最後は「あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」(23:43)です。イエシュアの生涯がその最初の「きょう」と最後の「きょう」の中に囲い込まれているのです。ルカはこのことを明確に意識して書いているように思われます。

●ちなみに、ルカの福音書の中で他に使われている重要な箇所を以下に見ることができます。

- ①「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家にとまることにしてあるから。」(19:5)
- ②「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」(19:9)
- ③「きょう鶏が鳴くまでに、あなた(ペテロ)は三度、わたしは知らないと言います。」(22:34)

●①②の「きょう」は、「失われたアブラハムの子」(イスラエルの民)に対する救いがなされることが、神の定められた必然の出来事として、目に見える形で実現されることを示唆する「きょう」と考えられます。③のペテロの否認の出来事は、マタイもヨハネも記しておらず、ルカとマルコのみです。しかもマルコの「きょう」はこの箇所には使われていません。イエシュアの弟子の筆頭格のペテロが、完全にイエシュアを否定するこの箇所は「きょう」という日時に意味があるのではなく、否認の背後にある最も深い暗闇が歴史の中に突入し、支配したことを暗示していると考えられます。それはペテロという個人を越えて、「終わりの日」に訪れる暗闇の力が神の定めの中で放たれるときを「きょう」という言葉で示唆していると考えられます。

●ルカの福音書における「きょう」という用法は、純粹に時間的な意味での「きょう」というよりは、神の定められたご計画が、必然的出来事として時間の中に突入してくる時に用いられているように思われます。したがってルカ 23 章 43 節の「きょう」は、終末論的な意味において、メシアが再臨された「その日

に」というニュアンスで解釈することができるのです。またヘブル訳聖書が、「パラダイス」を「エデンの園」としているのは、明らかに「御国の福音」の視点から解釈されているのです。